

市民学コース 富士見の歴史 6000年の富士見の歴史を展望する

## 第4回 新河岸川舟運から鉄道開設

平成28年7月2日(土) 10時~12時 鶴瀬公民館 第3集会室

講師 難波田城資料館 山野健一氏



「富士見市の歴史」講座・第4回は「新河岸川舟運から鉄道開通」でした。  
講師は難波田城資料館・文化財資料整理専門員の山野健一氏でした。



以前、「内川」と呼ばれていた新河岸川は「九十九曲がり」と云われ曲がりくねって流れていました。その川の流れる特徴は「舟運」の水量の確保に好都合でした。  
寛永15年(1638)に起こった川越の大火(仙波東照宮・喜多院などを焼失)は、その再建のための資材を江戸から運搬するため、「舟運」の活躍が不可欠でした。それをキッカケに当時の松平伊豆守信綱(城主)は、伊佐沼(川越市)から水を引き、新河岸川舟運を江戸と川越を結ぶ大動脈として整備を行うと共に舟運を盛んにしました。

○富士見市の河岸場は6ヶ所

伊佐沼河岸・蛇木河岸・本河岸・鶉<sup>うずら</sup>河岸・山下河岸・前河岸の6ヶ所

○舟運の種類

並船・早船・急船・飛切船・雁船など

○運んだもの

下り(川越→江戸) 米、雑穀、正油、酒、さつまいも、木材、マキ・・・

上り(江戸→川越) 瀬戸物、荒物、油、砂糖、干鰯<sup>ほしか</sup>、灰・・・

## ○船の種類

川船で吃水の浅い、平底の船。  
高瀬船、<sup>ひらた</sup> 船、<sup>にたり</sup> 船、小舟  
当時、河岸場のにぎやかさを象徴しているのは、南畑橋の山下河岸近くの町並みを「南畑銀座」と呼ばれていました。  
しかし、明治終わり頃になると、日本が「世界」への舞台へ上がるため、「富国強兵」を旗印に殖産興業などに力をいれ、絹や織物など輸出強化、「大量生産」「大量輸送」を支える「鉄道網」の発展を急ピッチに進めて行きます。

## 「鉄道の発展」

明治5年(1872)10月、新橋-横浜間の開通を皮切りに、上野-熊谷間が明治16年(1883)開通。

\*富岡製糸工場 明治5年開業  
明治39年(1906)には、北は北海道、南は九州鹿児島まで、「鉄道」鐵道が敷設されている。

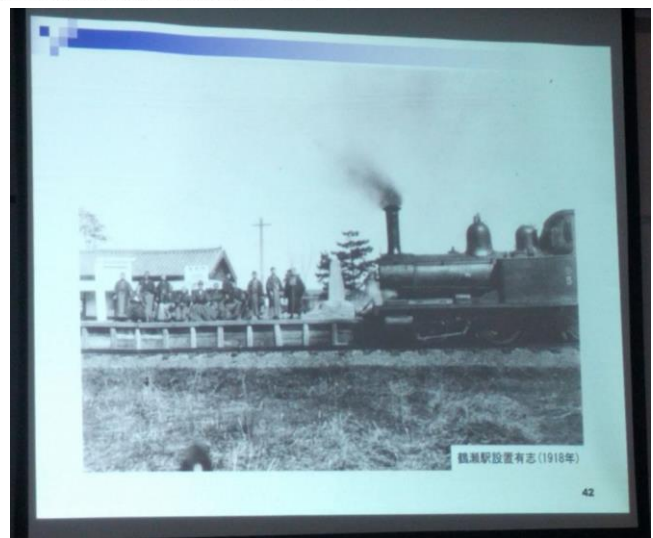
富士見市関連では「東上線」が池袋-田母沢で大正3年(1914)5月には開通する。  
その後「坂戸」まで延長された時(大正5年10月)東武鉄道と合併し、東武東上線と名称を変更する。なお、現在の「寄居」までの開通は大正14年7月10日である。

○池袋-川越間 1時間15分~20分

旅客。貨物混合列車では約2時間  
料金 特等 並等の1.5倍

並等 1マイル(2.9キロ)あたり2銭

当時は、上記機関車5両、貨車35両、客車13両で運行していたという(2代目根津嘉一郎氏)、かつては牛蒡<sup>ごぼう</sup>の産地で貨物は、入間のサツマイモ、ゴボウ、ジャガイモなどが東京へ、同時に東京からは畑作業に使う肥料として屎尿<sup>しりょう</sup>などを運搬していた。







「農民哀史」（澁谷定輔著）の中でも、早朝、鶴瀬<sup>しにょう</sup>まで屎尿車を引きにゆく場面がよく描写されており、当時の生活が良くわかります。（武州いま・むかしより）

戦後、昭和 31 年 9 月、鶴瀬村、水谷村、南畑村の山村が合併し、富士見村となった。当時の人口は 10,700 人だった。

「鶴瀬は、首都圏 30 キロ圏内にあつて、秀麗富士の容姿を朝に夕に眺められるベットタウン」このキャッチフレーズに応えられて、急速に東京都民の流入をみて、たちまち都市化された街はめずらしい（武州いま・むかし）平成 28 年 1 月富士見市の人口は 110,000 人を突破した。